様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　5 月　26 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520640
研究課題名（和文）　東欧の政治・社会変動とディアスポラ社会の相互関係に関する研究
—両大戦間期を中心に
研究課題名（英文）　Research on the Correlation between the East European Countries and Their Diasporas Centering on the Interwar Period.

研究代表者
山本　明代（YAMAMOTO　AKIYO）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授
研究者番号：70363950

研究成果の概要（和文）：
本研究では、ディアスポラを故国のナショナル、およびローカルな諸組織との間で相互的なネットワークによって接合する国外のエスニック・コミュニティと定義し、とりわけディアスポラのネットワークの相互性、重層性、多拠点性の解明を試みた。時代を第一次世界大戦直後から両大戦間期に定め、東欧諸国のなかでもハンガリーとチェコ・スロヴァキアに焦点をあてて考察した。取り上げた事例は、第一次世界大戦期アメリカ合衆国の移民コミュニティと本国との関係、アメリカの東欧移民の市民権とディアスポラの関係、本国の政治変動に伴うチェコ系移民コミュニティとスロヴァキア系移民コミュニティとの関係、トリアノン講和条約修正運動へのディアスポラ社会の関与についてである。これらの事例研究を通して、ディアスポラ社会が本国とホスト国の政府と地域社会に対して政治的影響力を行使する主要なアクターであることを示した。そして、国境を越えた領域において政治的変革の意図が模索・実行され、社会システムと人々の紐帯が再編される近代史の一側面を明らかにした。

研究成果の概要（英文）
This research defines the Diaspora as the ethnic communities outside of the homelands connecting with national and local organizations in their homelands via mutual network. This study examines the feature of Diasporas from Hungary and Czech-Slovakia centering on the interwar period. Taking up the case studies were the following: relationship between the East European ethnic groups in the United States and their homelands during World War I, Cosmopolitanism and Citizenship among East European immigrants, reconstructed homelands in the United States by Czech and Slovak Americans, the East European Diasporas involvement in Treaty of Trianon. By these case studies, it is clear that as the important actors the East European Diasporas exercised their influence on governments and local communities in homelands and host countries. In this way, they tried as the important actors to reform political system in their homelands from outside of borders.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・西洋史
キーワード：東欧、アメリカ合衆国、ディアスポラ、両大戦間期、ハンガリー

１．研究開始当初の背景

ディアスポラという用語は、もともとユダヤ人の離散を示す言葉であったが、とくに1990 年代以降、カルチュラル・スタディーズ研究やポストコロニアル研究の隆盛に伴って、より広い文脈で使用される概念となった。強制的な移動を強いられた黒人奴隷や政治亡命者・避難民、世界のさまざまな地域で生活を営む中国系移民、さらには資本主義のヘゲモニーによって土地から引き剥がされた現代の都市生活者に至るまで含有する意味内容は多様でかつ広範囲に及ぶ。そのような中で 1997 年から刊行が始まる「グローバル・ディアスポラ」シリーズを主導したロビン・コーエンは、ディアスポラの現象を被害者・労働・交易・帝国・文化型に類型化した上で、ディアスポラが故国・故郷への強い関心と共通の歴史認識、運命共同体としての意識を有するエスニック集団であることを強調した。この視点は、とりわけ文化人類学や社会学の領域で使用され、複数の国家領域における家族や労働、人々の意識を結びつける生活様式を意味するトランスナショナリズムの視点とは異なり、故国・故郷とのナショナルかつローカルな意識の紐帯と歴史性を重視していると言える。

東欧諸国の中でも本研究において取り上げるハンガリーとチェコスロヴァキアの両大戦間期の歴史研究は依然として政治史が中心であり、ディアスポラ社会への言及は、限定的であるか、ほとんど皆無に近い。1990 年代以降、ハンガリーでは、ロムシッチやザイドラーによるトリアノン講和条約に関する本格的な研究も発表されている。しかし、それらは政治史・外交史の視点からの考察が中心であり、国境外のハンガリー系住民に関しては、わずかに言及するに留まっている。

アメリカの移民史研究においては、アメリカ化が急速に浸透し、進展した時期として両大戦間期を捉えている。近年発表されたスロヴァキア系のアメリカ化の過程を考察した研究において、アレクサンダーは、徐々に社会的上昇を始めた移民がアソシエーション活動や祝典、次世代への言語・文化の継承を通して、スロヴァキア系アメリカ人としての愛国心を形成する過程を分析しているが、新たに成立したチェコスロヴァキアや故国・故郷といかなる影響関係を有していたのかに関しては言及していない。これは、ハンガリー系コミュニティについて考察したプシュカーシュの研究においても同様である。

このように、国民史の文脈においてのみ、この時代の社会を捉えている研究に対して、ガバッチアは、イタリアが輩出した多くの移民によって形成されたグローバルなネットワークの社会的結合とコミュニケーションの回路に注目し、ローカリズムの継続とナショナリズムの進展を重層的に捉え、イタリアと受入国の国民史の相対化を試みている。ガバッチアが示したディアスポラ概念を東欧出身の移民史研究に適応し、その有効性を検証するのは、まさにグローバルな東欧系コミュニティの各ネットワークの形成が始まる両大戦間期が適切である。

２．研究の目的

本研究では、ディアスポラを故国のナショナル、およびローカルな諸組織との間で相互的なネットワークによって接合する国外のエスニック・コミュニティと定義し、とりわけネットワークの相互性、重層性、多拠点性に注目する。時代を第一次世界大戦直後から両大戦間期に定め、東欧諸国のなかでもハンガリーとチェコスロヴァキアに焦点をあて、以下の 3 点について取り組む。

(1) 第一次世界大戦の敗戦に続き、1920 年のトリアノン講和条約によって領土が分割されたハンガリーにおいて、しだいに活発化する領土修正運動にアメリカ合衆国やその他のディアスポラ社会がどのような影響・支援を与えたのか調査・分析する。

(2) オーストリア＝ハンガリー二重君主国の崩壊とともに亡命政治指導者・ディアスポラ社会の支援によって成立したチェコスロヴァキアにおいて、その後、ディアスポラ社会との間でいかなる相互影響が生じたのか調査・分析する。

(3) 両大戦間期におけるハンガリー、チェコ、スロヴァキアの各ディアスポラ社会間のネットワークの接合・非接合の状況とその条件を検証した上で、上記二つの課題の研究成果を統合し、全体構想に位置づける。

３．研究の方法

本研究では移民の出身国とホスト国間に存在する様々なレベルの組織・共同体を通して出身国とディアスポラ社会との関係性を分析するために、ハンガリーとアメリカ合衆国において資料収集を行った。具体的には、両国の政府文書、諸組織の文書、同時代の新聞記事を収集することによって、両国政府、両国の政治・社会・文化・宗教諸団体、都市、故郷での動向の解明を試みた。

研究の分析枠組みを構築するために、ディアスポラ関係の研究書・文献を収集し、分析を行った。これによって、最新の研究動向に本研究を位置づけ、収集した史資料の考察を進めた。複数の学会において、研究成果を発表し、英文・邦文の論文執筆を行った。

４．研究成果

本研究の成果は下記に記すように、いくつかのテーマに分けて、総論的内容と個別の事例に取り組み、学会発表と論文の発表によって行った。以下に主要な論文の内容を紹介する

(1)「ハンガリー国民共同体の形成と移民のネットワーク」

本稿では、近代以降ハンガリーの国民共同体がいかに形成されたのか、本国と複数の移民コミュニティとの関係を中心に考察した。ブラジール＆マナーが指摘するディアスポラの問題領域の中でも国民国家とナショナリズム、ナショナル・アイデンティティと移民との関係性について取り上げ、ロジャーズ・ブルーベイカーが提起した国外同胞、市民的本国、民族的本国の 3 者の関係性を分析枠組みとして考察した。

19 世紀後半の国民国家形成期は、アメリカ合衆国をはじめ周辺諸国を含むヨーロッパ各地へと移民が流出する過程でもあった。本国と移民コミュニティとの関係は、移民者をめぐる家族や地縁的な関係から、移民コミュニティの発展に伴ってハンガリーの国民運動を介した連携へと変わった。

第一次世界大戦期に、故国とホスト国が敵対したアメリカのハンガリー系コミュニティでは、アメリカ化が急速に進行した。しかし、敗戦に伴うハンガリーの領土分割によって、本国においてだけでなく、移民コミュニティにおいても、国民共同体の存在を再確認し、その結合を強化する必要性が生じた。そ

の試みは両大戦間期の世界のハンガリー人大会をはじめとする様々な活動に現れている。

社会主義期には、周辺諸国のハンガリー系の処遇をめぐる問題を契機として、それまで断絶していたアメリカ合衆国や西欧諸国のコミュニティとの人的・文化的交流が再開された。東欧の体制変革以降になると、ハンガリー政府は王国時代の領土に居住するハンガリー系住民を統合する国民共同体のシンボルを再導入し、EU 加盟に向けて制度的にも周辺諸国のハンガリー系住民との関係強化を図った。他方、海外のハンガリー系コミュニティは、本国以外にも他の複数の国外のコミュニティとつながる草の根レベルのネットワークを形成し、ハンガリー国民共同体に有機的に参画していた。「世界に散らばるハンガリー人」を意味づける国境を越えたハンガリー国民共同体の存在は、グローバル化の進展に伴って、ますます強化され、その存在価値を高めている。

(2)「二つのホームランドの再現—チェコ・スロヴァキア国定博物館・図書館：移民の経験と故国の歴史の共有」

20 世紀初頭まで異なる歴史を刻んできた二つの移民コミュニティであるが、第一次世界大戦の開戦を機に、アメリカのチェコ系とスロヴァキア系コミュニティは、チェコスロヴァキアの独立運動をともに支援し、この運動を率先するようになった。チェコ系の自由主義者たちはボヘミア人国民同盟を、カトリック教徒はチェコ人国民同盟を結成し、スロヴァキア系移民はすでに述べた在米スロヴァキア人連合に結集し、やがて、三者を結合する在米チェコスロヴァキア会議が組織された。

スロヴァキア系コミュニティのリーダーは、建国される国家におけるスロヴァキア人の主権の位置づけを問題にしていたが、1915 年のクリーヴランド協定と 1918 年のピッツバーグ協定を経て、スロヴァキア系コミュニティも T. G.マサリクらのパリの亡命政府の運動を支援することを決定した。しかし、建国後、スロヴァキア系コミュニティのリーダーが要求していたスロヴァキア独自の議会・自治政府・裁判所が実現されなかったため、スロヴァキア系コミュニティにはマサリクやチェコスロヴァキア政府に対する不満が残った。

二つのコミュニティが再度協力する機会が訪れたのは、チェコスロヴァキアのズデーテン地方をドイツに割譲することが決定された 1938 年ミュンヘン会談後のことだった。二つの移民コミュニティは、在米チェコスロヴァキア会議が中心となり、ナチス・ドイツに支配された故国の解放への支援を行った。第二次世界大戦後の 1948 年共産党がチェコスロヴァキアの政権を掌握すると、1960 年代末までに約 50 万人が国外に脱出し、その一部が合衆国にも到着した。早速、創設された基金をもとに、亡命者たちの移転・定住への支援活動が開始され、1968 年の「プラハの春」弾圧後の亡命者支援へとつながっていった。1950 年には亡命者の組織、自由チェコスロヴァキア会議も結成され、合衆国の政治家や世論に向けてチェコスロヴァキアの硬直した政治・社会状況を訴える活動が行われるようになった。

その後は再び個別の活動が行われている。1970 年にスロヴァキア系の団体や協会の代表が結集した「世界スロヴァキア人大会議」がニューヨークで開催され、1993 年チェコスロヴァキア共和国の分離独立後には、スロヴァキアとアメリカ合衆国間のより密接な関係を促進するために、スロ

ヴァキア友の会が結成されている。チェコ系コミュニティに関しては、2002 年 9 月にチェコから贈られたチェコスロヴァキア共和国初代大統領マサリクの記念碑をワシントン D.C.に設置し、盛大な除幕式を開催している。

アメリカ合衆国における二つの移民コミュニティの歴史を見ると、チェコ系移民とスロヴァキア系移民は、到来した時期、目的地、従事した職業ともに異なり、信徒団やアソシエーション団体も個別の活動を行い、異なる結合を形作ってきた。しかし、1918 年のチェコスロヴァキア共和国の独立や第二次世界大戦期のナチス・ドイツからの解放、共産主義からの亡命者の到着という故国チェコスロヴァキアの大義と危機に直面することによって、両者は協力・団結して故国を支援する経験と歴史を共有してきた。1918 年から第二次世界大戦の中断を経て、1992 年まで続いた故国の共有が対立や反目を含みながらも二つの移民集団を故国とアメリカ社会に向けた政治活動において結び付けてきたと言える。

(3)「東欧のコスモポリタニズムと市民権—20 世紀初頭オハイオ州クリーヴランドにおける文化多元主義の試み」（投稿中）

本稿では、20 世紀初頭オハイオ州クリーヴランドにおいて東欧出身ユダヤ系事業家によって設立されたコスモポリタン同盟を手がかりに、東欧移民がアメリカの市民権をいかに認識・表現・要求し、市民社会への参加を試みたのかを考察した。移民第二世代のユダヤ系事業家は、デレック・ヒーターが指摘した市民権の 3 要素である地位、情緒、能力のいずれも享受・行使し、クリーヴランドの政財界において活躍していた。

コスモポリタン同盟の組織化の意義は、第一に出身国間の政治的対立や国民性や人種の相違と偏見を乗り越えることだった。第二に外国系住民こそが文化多元的な新たな価値を付与するアメリカの市民権を体現する可能性があり、第三に東欧・南欧出身の移民がクリーヴランドに貢献する能力のある市民であることを示すことだった。つまり、コスモポリタン同盟は、出身国の国民性とアメリカの主流社会の既存の価値を越えたアメリカの市民権を示し、それを体現する新たなコスモポリタン市民を多元的な社会統合のモデルとして提起した。

コスモポリタン同盟の構想には以下のような限界があった。第一には、ヨーロッパ中心主義の認識の枠組みから逃れることができなかった点である。第二には、階級が異なる労働者による市民権の要求を認識しなかった点である。東欧系エリートの試みは同じく東欧出身の移民労働者の搾取の上に成立していたことが同盟の設立と同時期に起こった衣服産業ストライキから明らかになった。第三に労働者階級がストライキを通してエスニックの境界を横断する連帯を形成したのに対して、コスモポリタン同盟はエスニック集団の単位を乗り越えることがなかった。

以上のような限界はあったが、出身国で展開する国民運動とつながるディアスポラとして存在し、アメリカにおいても文化的固有性が要請された後着の東欧移民が複数のエスニック集団を結合するコスモポリタン同盟を主体的に設立・運営したことは、ヨーロッパ系移民間では他に類をみない画期的なことだった。アメリカが第一次世界大戦に参戦し、画一的な市民的規範が社会を席巻する以前、コスモポリタン同盟が増加する移民を包摂する文化多元的な社会統合を目指し、多

様性を内包する市民権を表現・実践したローカルな試みには一定の歴史的な意義があったと言える。

(4)「両大戦間期ハンガリー系ディアスポラとトリアノン講和条約の影響」（投稿中）

本稿では、トリアノン講和条約締結後のハンガリーと移民コミュニティ間で形成された関係を政治・経済・文化的側面から考察した。両者がいかなる背景の下、どのような手段によって関係を形成したのか実態を分析するとともに、国民共同体のナショナル・アイデンティティの理念やシンボルがいかに形作られ、利用されたのかを解明する。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① Yamamoto Akiyo, Reorganization of Gender Relations among East European Immigrants in the United States: Realities and Representations, Nanzan Review of American Studies, Vol.30, pp. 121-130, 2008.査読なし

〔学会発表〕（計３件）

① 山本明代、コメント「東欧移民（ハンガリー系移民）の視点から」日本アメリカ史学会第 6 回年次大会、シンポジウム A「市民の境界―移民と先住民をめぐる排除／包摂」、名古屋大学、2009 年 9 月 20 日

② 山本明代「東欧移民の祝祭とパレード」、第 42 回アメリカ学会年次大会部会 D「文化的ボーダーランドと祝祭空間」、同志社大学、2008 年 6 月 1 日

③ 山本明代、「第一次世界大戦と移民コミュニティの再編―アメリカ合衆国のハンガリー王国出身移民」、日本西洋史学会第 57 回大会シンポジウム、朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンター、2007 年 6 月 16 日

〔図書〕（計２件）

① 山本明代、「ハンガリー国民共同体の形成と移民のネットワーク」、『ヨーロッパ・ロシア・アメリカのディアスポラ』、グローバル・ディアスポラ叢書第 4 巻、駒井洋・江成幸編、明石書店、2009 年、260-274 頁

② 山本明代、「二つのホームランドの再現―チェコ・スロヴァキア国定博物館・図書館：移民の経験と故国の歴史の共有」、『北米の小さな博物館２』、北米エスニシティ研究会編、彩流社、2009 年、238-247 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

山本　明代（YAMAMOTO　AKIYO）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授
研究者番号：70363950

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし